

■金盃（SII）アラカルト（過去全 64 回の分析）

- ※第 1 回（昭和 31 年）から第 18 回（昭和 48 年）までは大井ダ 2,400m で実施
- ※第 19 回（昭和 49 年）から第 58 回（平成 26 年）までは大井ダ 2,000m で実施
- ※第 59 回（平成 27 年）からは大井ダ 2,600m で実施
- ※第 21 回（昭和 51 年）は 2 頭が 2 着同着
- ※第 36 回（平成 4 年）は 2 頭が 3 着同着
- ※第 1 回（昭和 31 年）から第 50 回（平成 18 年）まではハンデキャップ競走として実施
- ※記録は令和 3 年 2 月 3 日時点

■上位人気馬の成績はそれなりだが……

単勝 1 番人気馬は 22 勝、2 着 10 回、3 着 5 回で、3 着内率が 57.8%、単勝 2 番人気馬は 14 勝、2 着 10 回、3 着 6 回で、3 着内率が 46.9%、単勝 3 番人気馬は 12 勝、2 着 7 回、3 着 7 回で、3 着内率が 40.6%となっている。上位人気に推された馬ほど好成績とはいえ、単勝 1～3 番人気馬の 3 着内率にはそれほど大きな差がない。

■およそ 3 分の 1 にあたる回で 3 番人気以内の馬がワンツー

過去 64 回のうち 48 回は、単勝 3 番人気以内の馬が勝利を収めている。また、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツーフィニッシュ決着は 21 回、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツースリーフィニッシュ決着は 5 回ある。

■高齢馬の優勝例も少なくない

馬齢別の勝利数を見ると、4 歳が 20 勝、5 歳が 22 勝、6 歳が 9 勝、7 歳が 6 勝、8 歳が 4 勝、9 歳が 2 勝、10 歳が 1 勝となっている。4～5 歳の若い馬が中心ではあるものの、幅広い年齢層から優勝馬が出ているレースだ。

■過去に4頭が“連覇”を達成

金盃において2回以上の優勝経験があるのは、第45回（平成13年）と第46回（平成14年）を制したインテリパワー、第47回（平成15年）と第48回（平成16年）を制したコアレスハンター、第56回（平成24年）と第57回（平成25年）を制したトーセンルーチェ、第63回（平成31年）と第64回（令和2年）を制したサウンドトゥルーの4頭となっている。なお、いずれも2年連続の優勝である。

■牝馬は1勝、外国産馬は未勝利

牝馬の優勝例は第16回（昭和46年）のヒダカスズランのみとなっている。また、外国産馬は第44回（平成12年）でザフォリアが、第48回（平成16年）でナイキゲルマンが2着となっているものの、まだ優勝例はない。

■騎手別の歴代最多勝記録は「6」

騎手別の勝利数を見ると、高橋三郎騎手が6勝で単独トップ。内田博幸騎手、張田京騎手が5勝で2位タイ、石崎隆之騎手、佐々木竹見騎手が4勝で4位タイとなっている。

■調教師別の歴代最多勝記録は「3」

調教師別の勝利数を見ると、川島正一調教師が3勝で単独トップ。秋谷元次調教師、岡林光浩調教師、川島正行調教師、栗田繁調教師、栗田武調教師、小暮嘉久調教師、佐藤裕太調教師、庄子連兵調教師、高橋三郎調教師、田中利衛調教師、遠間波満行調教師、福永二三雄調教師、藤田輝信調教師、宮下仁調教師が2勝で2位タイとなっている。

■3枠と6枠がやや優勢

枠番別勝利数を見ると、6枠（13勝）が単独トップ。3枠（11勝）が単独2位、5枠（9勝）が単独3位となっている。また、馬番別勝利数を見ると、3番（9勝）が単独トップ。1番と5番（各7勝）が2位タイである。なお、未勝利の馬番はないが、2番、8番、13番、16番はそれぞれ1勝どまりだ。